



碧玉の装飾アクセサリ（八日市地方遺跡出土品）



小松で産出する碧玉

平成クローズアップ

日本遺産 認定

Japan heritage

成年
28認定

「珠玉と歩む物語」小松

（時代の流れの中で磨き上げられた石の文化）

弥生の王を魅了した

驚愕の技とブランド

弥生時代、日本では自然や生命、権力の象徴として「緑」へのあこがれが強く、「緑の管玉」の国産化が進められます。小松では、豊富な埋蔵量を誇る那谷・菩提・滝ヶ原地区で産出された「碧玉」を原料に、八日市地方を拠点とした「玉づくり」が行われてきました。その技術は、現代でも復刻困難とされ、丁寧に磨き上げられた装飾品は、日本海交易を経て九州へと届けられ、弥生の王達を魅了し、小松産の玉は西日本を中心に広がっていきます。

現代の暮らしに輝く

美しい切石文化

古墳時代になると、加工しやすい小松の凝灰岩が注目されます。切石技術の発達に伴い、切り出した凝灰岩は建築部材に活用され、河田山古墳群の石室（古墳時代）、小松城の石垣（江戸時代）をはじめ、石蔵や石橋などの建造物が今に残っています。

九谷焼の源泉と

歩み続ける石の文化

江戸後期からは色絵陶磁器の九谷焼の原料となる陶石や、金・銅の採掘が小松で始まります。花坂地区で発見された陶石は、明治期に欧米で「ジャパン九谷」と賞賛された九谷焼を生み出しました。また、金平・尾小屋・遊泉寺地区で進められた鉱山の採掘は、大正期には全国有数の銅の産出を誇るとともに、遊泉寺銅山の付属施設だった小松鉄工所（小松製作所の前身）が誕生する契機となりました。さらに、観音下町と滝ヶ原町の石切り場では現在も石材の産出が行われ、石工の技術が現代に残されています。こうして歴史をたどると、時代ごとに「石の恩恵」を受けて「ものづくり」に生かしてきた文化に、深い感謝と先人への感謝の思いが強まってきました。



成年
30認定

「荒波を越えた

私たちの夢が紡いだ異空間」

（北前船寄港地・船主集落）

利常公による航路開拓と

繁栄の寄港地「安宅」

北前船は江戸中期から明治30年代にかけて、沿岸の諸港に寄港しながら蝦夷（北海道）と大阪の間を往來した廻船です。

北前船の航路開拓は、加賀前田家三代利常公が小松城に隠居した1639（寛永16）年に端を発します。この年、利常公は藩米を大阪へ輸送する際に、下関を廻った海路での直接搬送に成功します。従来は、敦賀で陸揚げして琵琶湖の水運で大阪に運んでいましたが、海路による搬送は高い利益が見込まれる画期的な方法でした。

その後、1672（寛文12）年、河村瑞賢によって西回り航路が整備されたことを契機に、北前船が活躍する時代が到来しました。交通の要地であった安宅は、北前船の寄港地として一大発展を遂げています。町並みにはロマンを感じさせる歴史遺産が多く残っています。

「水の郷こまつ」

水路を生かした物流

北前船により安宅港には全国から様々な商品が運ばれました。それらは梯川や前川、串川を経由して、木場潟、今江潟、柴山潟を結ぶ船によって当時の小松町や能美郡の村々、江沼郡にまで広く流通しました。小松の豊かな水運が北前船の恩恵を運び込み、さらに、絹織物や九谷焼などの特産品が東西各地へと運ばれたことで、小松の文化は全国に伝わりました。

全国連携で

寄港地の魅力発信

平成29年に11自治体が連携し、北前船をテーマとした物語が日本遺産に認定されました。その後、平成30年に小松市を含む27自治体が追加申請を行い、日本遺産に認定されています。認定による広域連携を生かし、魅力を磨いて発信していきます。

「奥の細道」に関する歴史文化

令和元年は、奥の細道紀行の旅立ちから330年目の節目に当たります。

「奥の細道」の道中、同じ土地を二度訪れたのは全国で小松だけです。そのため、「しをらしき 名や小松吹 萩薄」石山の 石より白し 秋の風」など、小松の句や芭蕉ゆかりの寺社・文化財が数多く存在します。小松を散策することによって、日本人ならではの言語感覚や美意識が込められた「奥の細道」の魅力を楽しむことができます。

「日本遺産 (Japan Heritage)」とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもの。認定を機に、ストーリー上で欠かせない文化財群を活用して国内外へ発信していくことで、地域の認知度向上とブランド化が図られます。

認定するストーリーは、地域型（単一市町村で完結）とシリアル型（複数の市町村にまたがって展開）の2種類に分かれています。

※小松市が受けた認定は「石の文化」と「北前船」の2件です。



「日本遺産」ロゴマーク